

■反転する宇宙の死生観

アルシオーネに生まれたときと死ぬときのことは鮮明な記憶があり、それによりまったく変わってしまったのが、人生観と死生観です。生と死は対極ではなく、生まれた瞬間に死の世界に入り、死んだ瞬間に新たに生まれるのです。そこには、死があらゆる生命を生かすことになるという、個人的な生死の解釈を超えた生命観がありました。

すでに生きているのに、「生きる目的を探す」などという迷いは自然界にはありません。この迷いは自分として生きられていないことを暴露しているにすぎません。

真に大切なことは、「命を生きる」ことであり、冒険を避けて、命を過保護にすることは、人生の目的を果たさず、単なる個人の眠つぶしとなり、宇宙の成長や、地球の進化に貢献することができません。

それでも、地球においては無意味なことではないのですが、このアルシオーネでは自分のプログラムや役割を全うしないと、死ぬことができないのです。死とは卒業であり、次の新たなプログラムに移行する意味において、祝福そのもののなのです。

自分のプログラムを全うすることが、「命を生きる」ことであり、人生を全うすることは、本来、「星への貢献」となるのです。これは、地球の先住民やネイティブと同じような星の物語※1に通じる死生観です。

※1 星の物語：ネイティブアメリカンに伝わる北オキダ星の伝説。自らを生かすことが誰かのためになっているという人生観。自分の命を生かすことが、すべてのためになるという一体的な生命観。

■アルシオーネで死に、地球に戻る

私はアルシオーネで天命を全うし、死を迎えました。死んだあとも意識はあり、肉体を脱いでしか入れない真っ白い控え室のような空間に入ります。そこでは、次の行先が複数示されていました。そのなかに「地球に戻る」というプランを見つけたのです。地球に戻るなんて思ってもみなかったことで、あまりの懐かしさに地球の記憶と再び接続しました。

そして、臨死体験で見た歴史と、宇宙体験で授けられた記憶をもって地球に戻る決心をしました。その途端、意識がなくなり、次に気づいたときには、なんと中学生の自分に戻っていたのです。どういうわけか池のほとりに横たわっており、一命を取り留めていました。

臨死体験中の地球で経過していた時間は約10分間と短く、体験中は通常の時間感覚ではありません。とにかく、途方もなく永い時間を超えて遥か彼方に行ってきたという感覚です。

宇宙体験はあまりにも超越的で深く、地球とは反転している世界だったことから、地球に戻ってすぐは何が起こったかもわからず、混乱してしまいました。しかし、次に自分が宇宙で体験したことの意味や、今の人類や社会への疑問が生じてきて、どうにかしてその答えを知りたいという気持ちが意識にあがってきました。